ミッドナイトブレイカー2～土の神の剣～

あべかわきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミッドナイトブレイカー２～土の神の剣～

【Ｎコード】
Ｎ７５５５Ｆ

【作者名】
あべかわきなこ

【あらすじ】
冬休みを間近に控えたある晩、英輔の前に３ヶ月ぶりに彼女が現れた。泊りがけで「山に剣を探しに行く」という彼女に付き合うことになった英輔だったが、そこで３ヶ月の壁を感じることになり……？最終章序幕にあたる現代ファンタジーシリーズ第２弾、キャラ総出のクリスマス仕様な短編でお送りします。

プロローグ（前書き）

本作品は、掲載中のファンタジー小説「ミッドナイトブレイカー」の続編にあたります。

プロローグ

１２月も終わりに近づき、しっとりと冷たい空気が部屋を満たしていた。
（さぶ）
風呂上りの身体を冷やさないうちに、俺はベッドに潜り込む。
明日は終業式で、その後はお待ちかねの冬休みだ。
お待ちかね、と言っても特に何の予定があるというわけでもない。
が、やはり長期休暇は学生にとっても嬉しいものなのだ。
部活で疲れていたのだろうか、布団に入ってからしばらくで、いい具合にまどろんできた。
このまま行けばすっとぐっすり眠れそう……
……だったのだが。
ガラスに何かがぶつかる音で、俺の意識は一気に引き戻された。
（……？）
虫がぶつかるような音でもなかった。
なんていうか。
コン、コン、と。
人工的な音だったのだ。
俺は横になったまま、ベランダ側のガラス戸を目視する。
すると、そこには
『英輔、開けて』
と口で訴えている、白いジャンパー姿の少女がいた。
……
……
「！？」
俺は慌ててベッドから飛び出して、鍵を開けた。
途端戸が開いて、背筋が震えるような外の冷気を感じる。
「ひゃー、寒かった」

何を詰め込んでいるのか、かなり膨らんでいるリュックを背負った彼女は、靴を脱いで綺麗に揃え、ごくごく自然に俺の部屋に上がりこんだ。
「朔夜！？　なんでお前がここにいるんだ！！」
俺は下にいるお袋に気付かれないように注意しながらも精一杯叫んでいた。
すると彼女はけろりと
「久しぶり、英輔。相変わらずだねー」
なんて、挨拶をした。

相変わらず、という言葉をそのまま返してやろう。
実際、彼女と会うのは約3ヶ月ぶりだ。
9月のあの1週間の後、すぐ鷹の方に帰るのかと思いきや、結局彼女は10月になるまでこちらに留まっていた。10月に入って、彼女は前触れもなくまた転校し、それ以来、会っていなかった。
一応メルアドは知っている。が、特に用もなかったので1度もメールを送ったことはなかったし、彼女も無駄なことはしないのか、同様だった。

それにしても
「なんでいきなり来るんだよ、しかも窓から！？　来るんだったら普通に入ってこいよな！！」
再会の余韻など感じる暇もなく俺は彼女の大胆さに打ちのめされていた。
「だってもう遅いしー、玄関から入るにしたって英輔のほうが困るんじゃない？」
と彼女は正論をさらりと述べる。
（……確かに、お袋にはこいつのこと言ってないし……なんか妙に勘違いされそうだし……）
俺が反論できないでいるのを見て、彼女は勝ち誇ったように満足

そうな顔をした。
　そんな顔がなんだか懐かしくて、俺は少しぼうっと彼女を眺めていたらしい。
「英輔？」
　彼女が不思議そうな顔をしたので、俺は慌てて
「……で、急になんだよ。お前、１人で来たのか？　ここまで？」
　尋ねると
「うーん、１人って言えば１人だね。ちょっと旅行をしに」
　と、彼女はどうもおかしなことを言った。
「……お前、もしかしてあのお父さんに内緒で来たんじゃないだろうな」
　俺は最悪の事態を予想しつつそう尋ねた。
「ううん、もともとイーグルの用事で来てるんだもん。ちゃんと行き先は教えてるし、ここに来ることも言ってある」
　と言って、彼女はその場にしゃがみこんだ。
「……おいこら、なぜそこで居座る」
　彼女は無視して部屋を見回す。
「英輔、この部屋ちょっと寒くない？　エアコンとかないの？」
「話を聞け！！」
「こたつもなさそうだなー。そこの毛布借りるよ」
「お前な！！」
　すると朔夜は呆れたような顔をして
「もー、別にずっと居座る気はないって。明日から『宝探し』に出掛けるんだから」
　と言った。
「……宝探し？」
　俺が呆気に取られていると
「そう、宝探し。この近くの山なんだけど、せっかくだから英輔も誘おうと思って来たの。明日から冬休みでしょ？　ちょうどいいかなって」

と、彼女は有無を言わさぬ笑顔でそう言った。

プロローグ（後書き）

こんにちは、あべかわです。この度はミッドナイトブレイカー続編にお目通しいただきありがとうございます。えーと、なんだかんだで続編作ってしまいました（汗）。
といっても実はこの2は短編でして、1を完読してくださった方々へのお礼、みたいな短いお話です。加えてクリスマス仕様で、話の中の日付とライブの日にちが合うようにアップしていきますのでこれから4日（？）の集中更新です。
このお話は春に公開予定の3（完結編？）への序章でもありますので、各キャラクターそれぞれに注目していただけるとありがたいです。
ではまた明日、お会いできれば幸いです。

第1話：ちょっと変わったクリスマス

正午前、俺は空腹を訴える腹の虫をなだめつつ、学校を出た。
すると後ろから
「おーい、英輔！」
と、友人の声がして俺は立ち止まった。
振り返ると、そこにはヒロをはじめとして、水泳部1年の面々が顔を揃えていた。
「？　どうした、皆揃って」
俺が尋ねると、
「明日クリスマスだろ？　予定ない男子はいっそ合コンでもやらね？　って話になってさ、お前もどうよ？　どうせ予定ないだろ？」
とヒロは言ってきた。
（……合コンねえ……。まだ早いと思うけどなあ……）
俺はそう思いつつも、その場にいる面々の、新たな出会いへの期待に胸を焦がしているような顔を見ていると何も言う気になれなかった。
「……悪い、明日はちょっと用事があるんだ」
と、俺は返答した。
「な！？」
ヒロは頬に手を当てて、あからさまにショックを受けた、というリアクションを取る。
冬休みに入ってテンションが上がっているのだろう。
「何！？　お前、もしかして彼女が出来たとか言うんじゃないだろうな！？　お、お前には抜け駆けの前科があるんだからな……ってああ！？　もしかして憐ちゃんと遊ぶ約束が入ってたりするのか！？」
と、鋭いところをヒロは突いてきた。
俺は目を逸らす。

（……遊びに行くんじゃないんだけどな……）
しかしそれだけでヒロは確信したようだった。
「ウアアー！！　英輔、お前はいつからそんな奴になってしまったんだ……！　くそう！　もう合コン誘ってやらねえぞ！　せいぜいイチャつくがいいさ！！」
と、彼は他の面々に『行こうぜ』と声をかける。
しかし俺が彼らの背中を見送っていると、ヒロはささっと戻ってきて、
「おい英輔、休みが明けたら戦果を報告しろよ。包み隠さず言うんだぞ、このむっつりスケベ！！」
と、俺の背中をばしばし叩いた。
「だから！　俺むっつりじゃねえっての！！」
笑いながら駆けていくヒロにそう叫んでいると、周りの下校中の生徒に少しばかり注目されてしまった。
（……）
俺は赤面しつつ急ぎ足で家に帰った。

「ただいまー」
そう言って玄関の戸を開けると、俺の目に見慣れないものが入った。
靴だ。
今この家には、俺とお袋しかいない。
よって常時床に並べてある靴は俺のものかお袋のものしかないのだ。
なのに今日は若者の、女物の靴が1組、揃えてあった。
……そして、それは若干見覚えがある靴だった。
「英輔おかえりー。お友達が来てるわよ」
と、お袋はどこか興奮気味な様子でやって来た。

「……朔夜？」
俺がげんなりしながらそう尋ねると
「そうそう、憐ちゃん。もー、英輔ったら学校のこと全然話してくれないから彼女がうちに来たときお母さん焦っちゃったじゃなーい！　隅に置けないなあ英ちゃんは！！」
と、お袋はノリノリで俺の背中を叩いた。
……さっきから背中を叩かれすぎて痛いくらいだ。

俺が居間に入ると、朔夜はしっかりとテーブルについていた。
「おかえりなさい、東条君。お邪魔してます」
と、妙にかしこまって言う彼女の、昨夜とのギャップに俺は困ってしまった。
「今ご飯作るからねー、憐ちゃんも食べるでしょ？」
とお袋はエプロンの紐を結びつつ台所に立った。
「ありがとうございます、いただきます」
と、朔夜は『良家のお嬢様』らしく微笑んだ。

お袋は鼻歌を交えつつ、チャーハンを作っているらしい。
野菜を炒めるフライパンの音に声を隠しつつ、俺は朔夜に言った。
「おい、お前、今日は外で大人しくしてろって言っただろ！？」
「だってさ、明日から数日出掛けるわけだしさ、ちゃんと話しといたほうが後々いいんじゃないかなーって」
と彼女は眉をひそめつつそう言った。
「な！？　お袋に話したのか！？」
そんな俺の声が聞こえたのか、
「英輔、明日から旅行に行くんでしょ？　ちゃんと準備できてるの？」
とお袋は普通に尋ねてきた。
「え、あの！？　いいのか！？」
俺はしどろもどろになっていた。

（だって、ほら、一応若い男女が2人きりで出掛けるんだぞ、しかも泊まりで！！）
「あら何英輔、もしかして隠して行くつもりだったの？　もー、いやあね。お父さんが帰ってくるのは大晦日だし、誰も止めないわよー。昔はお母さんもねー、好きな人と2人で行ったわよー、スキーでしょ、食べ歩きでしょ、あとね……」
と、お袋は自分の若かりし頃の話を語り始めた。
俺は聞いていて途中でくらっときたのだが、朔夜は目を輝かせて最後まで聞いていた。

結局、万事うまくいったことになる。
彼女の思惑通りに。
「英輔のお母さん面白いねー。あんなにすんなりオーケー出してくれるとは思わなかった」
と、朔夜は俺の部屋の椅子をくるくる回しながらそう言った。
「……俺もびっくりだよ」
（お袋があんなに緩い人だったなんて……）
まあ、親父が堅物なのでちょうどいいのかもしれないとも思う。
それに今回だって、やっぱり隠して行くのも気が滅入っただろう。
「明日の朝8時にここに来るからそれまでに準備しといてね。まあ2日分くらいの準備で多分大丈夫だから」
と彼女は言った。
「あのさ、『くらい』って何」
俺が毎度のことを尋ねると
「お宝を見つけるのにどれくらいかかるかなんて正確にはわからないの！　でも今回は居場所の分からないケモノと違って位置が大体特定されてるし、それに動かないものだし」
と彼女は言った。

「ふーん……」
俺がいぶかしげな目で見ているのが気に入らなかったのか
「何その目！　今回は危なくないって！　ほんと、ハイキングだと思って！　皆仲良く！！」
と、朔夜は無駄に元気に言った。
俺はふと疑問に思った。
（……皆仲良く？）
しかし尋ねる間もなく彼女は荷物を背負って立ち上がった。
「じゃあね、英輔。また明日！」
そう言って、彼女は部屋を出て行った。
そんな背中を見送りつつ
（……昨日も泊まったんだし、今日も泊まればいいのに……）
なんて、俺は自然と思っていた。

翌日、予告どおり朔夜は8時にやって来て、俺は彼女に付いていくまま電車に乗り込んだ。
「で、どこ行くんだ」
今更ながらに俺は隣の朔夜に尋ねる。
「ここ。龍霊山」
そう言って彼女は地図を取り出した。
「龍霊山……？」
（名前は聞いたことあったけど……行ったことないなあ……）
「案外この近くなんだよ。この電車であと3時間ってとこかな」
と朔夜は地図を指でなぞる。
「しかしこの時期に山かよ。何探すんだ？」
この時期じゃ紅葉ももうないだろうし、むしろ寒いんじゃないだろうか、山は。

「だからお宝って言ったでしょ？　具体的に言うと、剣だね」
と、彼女は物騒なワードを吐いた。
「……剣……」
それで俺は思い出す。そういえばこいつはそういう危ない奴だったと。
「イーグルの武器開発室からの依頼でね、どうもこの山に強い力を持つ剣らしきものが眠ってるって話で。それがまた『土』の属性を持った珍しい剣らしいんだよ」
と朔夜は少し興奮気味に喋る。
「へえ……。で、それを見つけに？　なんでお前が」
と俺が尋ねると
「え？　いやほら、土属性の剣があったら水の属性のケモノ相手に有利かなーって」
と彼女は答えた。
（……そっか。こいつの弱点は水だったっけ）
そんなことをぼーっと考えながら、ふと周りを見回すと、今電車に乗っているのは若者がほとんどで、それも大体がカップルだった。
（今日、クリスマスだっけ……）
俺はあまりじろじろ周りを見ないように視線を落とす。が、周りのカップルは『今から遊びに行きます』的な雰囲気の装いなのに対して、俺達はというと、防寒対策ばっちりに着込んで、さらには泊まりに備えた大荷物。
（……クリスマスに山……クリスマスに山登り……。ムードねえな）
と俺は頭の中で反芻していた。
しかし
（……でも2人で出掛けるってことには変わりないのか？　……傍から見たら俺達ってどんな風に見られてるんだろ……）
と考えたりもする。
ちらりと横を見ると、朔夜はやけに楽しそうに地図を眺めていた。
（こいつはどういう意図で俺を誘ったんだ……？）

と気になってみるも、直接訊くわけにもいかず
（……まあいいか。どうせ暇だったし、な）
俺はそう納得して、目を閉じた。
その時なぜか、俺の口元は自然と綻んでいた。

途中で鈍行に乗り換えて辿り着いた駅は、自動改札なし、しかも駅員が1人しか見えない、『超』がつくほど簡素な駅だった。
「あ、あれあれ、あれが龍霊山だよ」
と朔夜が指差したのは、ちょうど正面に見える、半分はげかけたような山だった。
しかし
「意外とでかいな……。ほんとに剣、見つかるのか？」
と、思ったのが率直な感想だ。
「大丈夫大丈夫、あらかじめ位置は特定されてるから、その辺りを探せばオッケー。それに今回は人手も十分だしね～」
と朔夜は意味ありげに笑った。

……その意味を理解したのは、件の山の麓に辿り着いたときだった。
彼女はおもむろにグローブをはめ、リュックから1本の刀を取り出して、抜いたのである。
久しぶりに見る、妖刀『火光』だった。
そして彼女は宙に線を引き、
「三炎の二、三、来い」
そう言った。
（――は！？）
俺が何かを言う前に、そいつらは現れた。
「んーー！　なんかいい空気～～」

伸びをしつつそう言ったのは白い髪に白いコートを纏った女。豊かな胸、すらりと長い手足など、女性として非の打ち所がないような完成した身体を持っているが、側頭部から鼠の耳らしきものが出ている点で、どこか可愛らしさをかもし出す。が、
「む、なんでアンタがここにいんのよー」
と、俺を見て即悪態づくあたり、相変わらずの男嫌いらしい。
そして
「あら、英輔クン！　久しぶりじゃな～い」
そう、宙に浮くような挨拶をしたのは、色鮮やかな赤い民族衣服を纏う金髪赤眼の美青年。
「ちょっと見ないうちに少し背が伸びたんじゃなーい？　思春期の男の子ってこれだから素敵」
と、相変わらず色目を使って俺に擦り寄ってくるので
「いや、そんなことは」
と俺は朔夜の後ろに逃げ込んだ。
「……ていうかいきなりなんでこの2人を呼び出してんだ、お前は。疲れるんじゃなかったのか？」
と俺が朔夜に問うと
「ノープロブレム。ここは稀に見るパワースポットだからね、緋衣達みたいな人間と契約してる妖でもここなら私からの体力供給なしで自由に動けるってこと」
と彼女は言った。
「んー、でも焔クンは流石に無理ってことねん」
とオカマ男が言うと朔夜はどこか残念そうに苦笑した。すると
「あの子は別格だから仕方ないわよ、憐ちゃんのせいじゃないわ」
慰めるように鼠女が言った。
（焔……か）
朔夜が使役する妖は全部で3人。最後の1人、あの鹿の化身の少年は、力が強すぎて流石に出て来れないということか。
「とりあえず今回は皆で『土の神の剣』を探すんだからね！　喧嘩

しないように！」
と朔夜は鼠女とオカマ男のほうを特に意識してそう宣言した。
「「は～い」」
と、２人が気のない返事を同時に返したかと思うと
「ちょ、ハモんないでよ馬鹿火砕！！」
「はあ～？　ハモったのはそっちでしょ！」
と、早速喧嘩を始める始末。
朔夜と俺は溜め息をつきつつ、歩き出した。

第1話：ちょっと変わったクリスマス（後書き）

続きはまた明日……

憐「じらさずにさっさと出せよもー」

ははは……

第2話：彼の真実

最寄り駅の様子から想像すると、この山は観光スポットというわけでもないらしい。

ということはあまり道も整備されていないのでは……という俺の予想は少し外れていた。

「何か意外と歩きやすいねえ、この山」

と、先頭を行く朔夜が言った。

山道は草が伸び放題かと思いきや、綺麗に刈られていたりと、まるで俺達が迷わないように道が作られているような感じだった。

よくよく見ると、草を刈った跡というのもどうも新しい気がする。それこそここ数日内ぐらいのものではないだろうか。

「ねえねえ憐ちゃん、今日はこの山で泊まるの？　まさか野宿？」

と、微かにこちらに視線を注ぎながら鼠女が尋ねていた。どうやらこちらを警戒しているらしい。

そんな野良犬を見るような目で見ないで欲しいと思いつつも、確かに泊まる場所については俺も気にしていたことだ。

「ん？　えっとね、この山には山小屋があるって地図に書いてあるからそこを使おうと思ってるんだけど」

と、朔夜は言った。

「……山小屋？　誰か管理人がいるのか？」

俺が尋ねると

「んー？　連絡先とか書いてないからなー、いないんじゃない？」

と、朔夜は暢気なことを言った。

「お前な、そんないつ建てられたかも分からない山小屋、無人だったとしたらもう腐ってるぞ！」

俺が言うと

「うっるさい男ねー、とりあえず屋根があればいいのよ。アンタ達は外で寝なさいよね、当たり前だけど」

と、鼠女が俺とオカマ男に向かって言い放った。
「んまー！！　男女差別はんたーい！！」
傍らにいたオカマ男が反抗する。すると
「男か女か分からない奴に言われたかないわよ！！」
と、鼠女は少しだけ穿ったことを言った。
「あーもう2人とも！！　お昼にするよ！！」
と、朔夜は声を張り上げた。
そういえばそろそろお昼時だ。
しかし
（……俺、あんまり食べ物持ってきてないんだよな……）
そりゃあ今日のお昼になるパンぐらいは入れてきたが、まさか山で寝泊りするとは思っていなかったので、少し食べ方を考えなければならない。下手すると帰る頃には体重が減っているだろう。
そんなことを思って急に不安になっていると
「今日のお昼は私が用意してるからねー」
と、朔夜が元気にそう言って、リュックからレジャーシートを広げ始めた。
（……遠足か？）
しかしお昼を用意してくれているとなるとありがたい。彼女の無駄に膨らんだリュックは恐らく先のことを見越しての大荷物だったのだろう。

「じゃじゃん」
と、朔夜はそれらを広げた。
俺は目を見張る。他の2人も沈黙している。
「……これは……」
かなり多数のタッパに入れられた高級そうな料理達。
サラダからメインディッシュ、デザートまでより取り見取りだった。
「……どうしたんだ、朔夜。まさか作ったわけじゃないだろ？」

俺は少し不安になって尋ねた。
「昨日泊まったホテルのディナーバイキングからちょっとずつくすねてきたの。大丈夫大丈夫、この季節じゃまだ腐ってないよ」
と、朔夜は笑顔でそう言った。
「……くすねたって……」
（すっごい迷惑な客だっただろうなあ、こいつ……）
そんな俺の思考を表情から読み取ったのか、
「ちゃんとギャルソンに多めのチップ握らせといたから大丈夫だよ」
と、彼女は口を尖らせた。
（……チップ……？　こいつは一体どこのホテルに泊まったんだ……）
俺は頭を抱えた。

とりあえず美味しい昼食をいただいて、俺達は再び山道を登り始めた。
結局始終鼠女とオカマ男はつまらないことで口論していたが、聞いているとなんだかんだで賑やかで楽しめた。が、その2人の会話を聞いていると、どうも朔夜とは話すタイミングが見つからなくて、少し消化不良な感じもあった。

空が暗くなりかけた頃、朔夜は前方を指差した。
「山小屋だ！」
驚くべきことに、それはちゃんと存在していた。
しかも有り得ないくらい、新しいのだ。
加えてなぜか、鍵も開いていた。
朔夜が扉を開けて中に入り込んだ。
「思ったより綺麗だー。しかも部屋2つあるよ！」
と朔夜が言うと

「ふうん、じゃあワタシ達も入れるわねん、英輔クン」
とオカマ男が俺にウインクする。
（げ、こいつと相室か……？　襲われたらどうしよう……）
なんて自分でも驚くような心配が頭をよぎったのはさておき、それにしても出来すぎてはいないだろうか。
こんな寂れた山の山小屋なんて、とっくに廃棄されていそうなものだ。それなのにこの新しさといい部屋がきちんと分かれているあたりといい……
そんな中、
「……ねえ、何か匂わない？」
と、鼠女が呟いた。
「匂うって何が？」
朔夜の問いに答える前に、鼠女はささささと小屋の裏側へと回った。俺達が追いかけると、そこには。
「……温泉？」
微かな硫黄の香りと共に、白い湯気が上がっている。
「こりゃもうリゾートだね」
と、朔夜が言った。
（……なんで、温泉……？　しかも……）
「おい、なんであんなに綺麗なんだ、この温泉。自然に放置されてたらここまで綺麗じゃないぞ、湯とか」
と俺が言うと
「山のお猿さんが掃除してるんじゃないの？」
と、素なのか冗談なのかよく分からないことを彼女はけろりと言った。
「んなわけあるか！！」
俺がそう叫ぶと、鼠女が
「ったくアンタもいちいちぴーぴーうるさいわね！！　いいじゃない、使えるんだから」
と、朔夜の後ろから反論してきた。すると

「しかも男湯と女湯が分かれてるわよ～ん」
と、少し離れたところからオカマ男が声を上げた。
「は？」
そちらを注視すると、本当にもう1つ湯があって、その前に『男湯』と書かれた看板があった。よく見ると、こちらの湯の近くには『女湯』と書かれた同じものがあった。
それらの看板も小屋同様、妙に新しい。
さらには『湯船にタオルを入れても構わないからね！』なる張り紙までしてある。
（……待てよ……）
それらの字を、俺はどこかで見た気がする。
かなり達筆の、大人の字だ。
そして俺は結論に至った。
（……朔夜のお父さんの字だ……）
いつぞや、9月の1件でお礼状が家に届いたことがある。そのときの字はまさかの直筆で、俺は少しばかり感動したものだ。まあ、文面自体は俺に対するお礼なのか、釘うちなのかよく分からないものだったのだが。
「脱衣所まであるし……なんか親切な山だね」
と、朔夜はのほほんと笑っている。
あれは恐らく、天然だ。
（……気付いてやれよ、朔夜……）
娘のために前もって先回りして山に道を作り、小屋を建て替え、温泉まで整備した親馬鹿を通り越した父の愛に俺は同情し、感動した。

急いで建てたのだろう、部屋の中は意外と簡素だった。
部屋も2つに分かれているが、ベッドは各部屋に1つずつ。……

まあ、ここまで持ってくるのも大変だったんだろうと思う。
勿論女部屋と男部屋に分かれた。
俺が荷物を整理していると
「ねーえ英輔クン、そろそろお風呂入らなーい？」
と、しばらくベッドに転がっていたオカマ男が切り出してきた。
「……あんた、入れるのか？」
俺は疑問に思っていたことを訊く。
だって相手は一応蛾だ。
「この姿なら入れるわよーう。これでも日々磨いてるんだから！」
と、オカマ男は髪を色っぽくかき上げた。
(何を磨くんだ、何を)
と呆れつつも、俺はじっと彼を眺めた。
流れるような長い金の髪。前髪で右目は少し隠れているが、片目だけでも十分魅力がある。
……弁明するが『魅力がある』、というのは俺が特別それに魅力を感じているというわけではない。
一般的に見て、こいつは間違いなく『美青年』の部類なのだ。
だから、俺は疑問に思ってたんだ。
「あら何、英輔クン、そんなにワタシを見つめないで！　照れるわ！」
頬に手を当ててふざけるオカマ男に少々呆れつつ、俺はその疑問をとうとう口に出した。
「なあ、なんであんた、普通に喋らないんだ？」
俺は以前1度だけ、彼が普通に喋るのを聞いたことがある。あれは聞き間違いではないだろう。
「普通って？」
オカマ男が首を傾げた。俺は少し困ってしまって
「いや、だから、その……オカマ口調……」
と、視線を逸らしつつしどろもどろに言うと
「……」

彼はしばらく黙った。
沈黙が続く。
（……なんか、まずいこと言ったかな……）
と、俺が後悔し始めたとき
「……1度聞かれてたからね、やっぱりばれてたか」
落ち着いた、男の声が聞こえた。
（え）
俺が顔を上げると、そこには苦笑というよりどこか儚さを顔に浮かべた彼がいた。
「確かに口調は作り物だよ、英輔」
澄んだ声。いつもの宙に浮いたような声とはまた違う。
「じゃ、じゃあなんでわざわざ……」
俺は自分の顔が少し熱くなってきていることに気がついてまた顔を伏せた。
なんていうか、オカマな感じで喋られるよりこっちのほうがかなり、色っぽく感じるのだ。
（……って！！　俺、なに男に色気を感じてるんだ馬鹿！！　俺の馬鹿！！）
俺の苦悩をそっちのけに、彼は話す。
「まあ、端的に言えば女性避けかな。あんな感じに男にしか興味ないって思わせれば誰も寄ってこないだろ？　ついでにあの口調だと男も本気にはなってこない」
……ということは。
「別に男が好きってわけじゃないのか？」
俺はそれが少し意外で、ちょっとした期待を込めて尋ね返した。
すると彼は柔和に笑って
「まあね」
と答えた。
俺はそれを聞いてほっと安心した。
（なーんだ、そうかそうか。なら今夜は安心して眠れそうだ）

なんて俺が思っていると
「……まあ、嫌いでもないけどね」
と、彼はぼそりと呟いた。
「は！？」
俺の叫びを無視して
「じゃあ英輔クン、お風呂入りましょうか～。もう女共は入ってるみたいだし～～」
と、口調を戻したオカマ男は俺に擦り寄ってきた。
「なっ！？　お、俺後で入るからあんた先に入れよ！！」
「え～～？　ここは男同士、水入らずってやつよーう。嬉し恥ずかしの青春について語り合いましょ？」
「なーーーー！？」
……やっぱりこの男は分からない。

そんな感じで、オカマ男はるんるんと、俺はげっそりと風呂から戻ると、隣の部屋のドアが開いて
「あ、英輔！　今からこっちでトランプやらない？」
と、朔夜が待ち構えていたかのようにそう言った。
「トランプ？」
なんだか本当に、修学旅行にでも来た気分だ。
……まあそれなら女子がここまで近くにいることはまずないだろうが。
「にゃー！！　憐ちゃん駄目よー！！　この部屋は男子禁制って貼り紙があったわ！！」
と、どこからともなく鼠女の声が聞こえた。
「？」
その姿を俺がきょろきょろと探していると
「……緋衣、アナタなんでそんなカッコしてんの？」

と、呆れ気味に傍らのオカマ男が声を出した。
その声の方向は、朔夜の肩のあたりに向かっている。
よく見ると、朔夜の白いシャツに溶け込むように、純白の小さな鼠が乗っていた。
「うっるさいわね！！　お湯でも若干ダメージ食らうのよ！！　今は省エネモードなの！！」
と、鼠は吼えた。
「じゃあ無理して入らなきゃいいのに」
と、オカマ男が鼻で笑うと
「黙んなさい！！　旅の思い出はお風呂からって決まってんでしょ！？　温泉に入って何が悪いのよ馬鹿ーーーー！！」
と、半分泣きが入ったような声で鼠女は喚いて朔夜の胸にしがみつく。
「よしよし。だよねー、やっぱ温泉は入りたいよねー。今のは火砕が悪いよ」
と、朔夜は鼠をなだめるように撫でつつ、オカマ男をたしなめると
「う……」
オカマ男は少しバツの悪そうな顔をした。
それから何を挽回しようとしたのかオカマ男はすすすと朔夜の傍によって
「英輔クン、結構いいカラダしてたわよ～」
と、彼女に耳打ちした。
「な！？」
俺が赤面すると同時になぜか朔夜も赤面した。
「あら？　想像した？」
とからかうようにオカマ男が言うと
「し、してないし！！」
朔夜は顔を真っ赤にして叫んだ。
それを見て俺はさらに赤くなる。
最終的に

「だー！　変態！！　火砕コロス！！」
怒りに燃えた鼠女が元の姿に変化して、オカマ男に目にも留まらぬアッパーをくらわせた。

第2話：彼の真実（後書き）

火砕さんのあんな話がちらりと出てきました。
以後緋衣嬢にもスポットライトが当たるとか当たらないとか、明日はもうちょっとどばっと更新するかもしれません。
では皆さん、メリークリスマース！

第3話：目的

結局、『男子禁制』（勿論朔夜のお父さんの字）と書かれた貼り紙は無視して、俺達は女部屋に入り込む形となった。
「……顎が、割れるかと思ったワ……」
俺の後ろでオカマ男が顎をさすりながらぼそりと呟いた。
多分、先ほどのアッパーが相当痛かったんだろう。
「ふん！　憐ちゃんに変なこと吹き込むのが悪いのよ、ああ嫌らしい！！」
すっかり元気な鼠女は人間の形に戻っても相変わらず朔夜の傍から離れない。
「まあまあ……」
と朔夜は今日で何度目かのなだめる台詞を吐いた。
そんな彼女の前には白い箱がある。
「……おい、それ、何だ？」
俺が尋ねると、朔夜は待ってましたと言わんばかりに
「ふっふっふ……」
と得意げに笑って
「じゃじゃん」
またしても厳かに、白い箱の蓋を開けた。
するとそこには、少しへしゃがり気味なホールシフォンケーキがあった。
「わあ、ケーキ！」
まず歓声を上げたのは鼠女だ。やはり妖といえども女というのはこういうものに目がないらしい。
俺はというと
「……おい、これもあのリュックに入れてたのか？」
そんなことを尋ねていた。朔夜はきょとんとして
「そうだよ。だって今日クリスマスだし」

と、当たり前のように答えた。
（……だから、こいつは一体何しにここまで来たんだ……）
俺は半ば呆れつつも、はしゃぐ女2人を前にしては何も言えず、ただケーキが配当されるのを待っていた。

形はともかく味はかなり上質なケーキを頂いてから、果ての見えない『大富豪』が始まった。
というのも、鼠女がオカマ男より下位になると激しく闘志を燃やして何度も何度もやり直しをするのだ。
朔夜は楽しそうにゲームを続けるし、オカマ男は鼠女の挑戦を必ず受けて立ったから、誰もそれをやめようとしなかった。
そんな状況が数時間続いて、
（……そろそろ眠いんだけどなあ……）
俺があくびをすると
「英輔、もう眠いの？」
と、朔夜が目ざとく尋ねてきた。
「もうってなあ、結構いい時間だぞ、ほれ」
俺が午後１０時を示す腕時計を彼女に見せると
「まだ１０時だよ？」
と彼女は顔をしかめた。
「明日も早く起きて剣を探すんだろ？　そういうときは早く寝るもんなの」
と俺が諭すと、朔夜は少し不満げに目を伏せて唸ってから
「……分かった」
と呟いた。

そんな日の晩は、オカマ男は蛾の姿になって俺にベッドを譲ってくれた。そういう紳士的なところには若干感謝しつつ、俺は布団の中でふと思った。
（……なんていうか、あいつと一緒に出掛けてるのにあんまりゆっ

くり喋ってないような……）
昼間はほとんど鼠女とオカマ男の口論を聞いてただけだし、さっきもあんな状態だったし。
（やっぱ3ヶ月も音信不通だと……）
少し距離が開いてしまったのだろうか。

翌朝、山小屋に置いてあった保存用の食料（勿論製造日はごく最近の）を朝飯にして、また山登りは再開された。
今日は空模様が少し怪しい。加えて、山全体にうっすらと霧がかかっていた。
朝は苦手なのか鼠女とオカマ男は昨日に比べると口数が少なくなっていた。先を行く朔夜もどこか眠そうな顔をしている。あの様子だと夜遅くまで鼠女と何か遊んでいたに違いない。
「おい朔夜。大体の位置が特定されてるって言ってたけどどのあたりなんだ？」
俺が尋ねると
「んー？　もうすぐー」
と、彼女は気のない返事を返した。俺はやれやれと視線をあたりに移す。
霧はどんどん濃さを増しているような気がする。
なんと言うか、少し警戒心を覚えざるを得ないような、そんな霧だった。

そうして、ようやく朔夜が足を止めた。
「えっと……この辺りって書いてあるんだけど……」
と彼女は言うが、周りにはそんな、剣がありそうなスポットなど無い。あるとすれば土の壁だ。

「仕方ない、この辺掘ろうか」
なんて、彼女は言い出した。
「は？」
俺が少々非難めいた声を出すと
「だ、だって土の神の剣は封印状態で気配もあんまり感じられないんだもん。今回だって古くからの伝承を元に何年も検討された結果作成された地図を貰ってここまで来たんだから」
と朔夜は妙に長い言い訳を吐いた。
それで、俺は今更ふと気付いた。
俺達が来る前に、朔夜のお父さん達がこの山に足を運んでいるのは間違いない。恐らくその時にだって調査ぐらいはしているだろう。
が、それでも朔夜をここに遣ったということは、剣は見つからなかったってことなんじゃないだろうか。
（うーん……、となると探すのは相当骨が折れる作業なんじゃないのか？）
俺がそんなことを悶々と考えていると、朔夜はなにやらごそごそとリュックの中をあさっていた。
「何探してんだ？」
俺が尋ねると
「スコップ。……おっかしいなー。忘れたかも」
朔夜はそんなことを言って、片手に刀を持った。
そして
「仕方ない。手で掘って、手で。私は火光使うから」
なんて、幼稚園児の芋掘りのようなノリで言った。
（は！？）
「アホか！！　こんな硬そうな土、手で掘りきれるわけないだろ！！　刀も論外！！　傷むぞ！？」
俺がそう叱咤すると、朔夜はむっと顔をしかめて反論した。
「やってみないとわかんないじゃん！！」
もはやけんか腰になりつつあった。

「あのな、正確な位置も分からないのに無鉄砲に掘っても見つかるわけないだろ！！」
俺がそう言うと朔夜は苦々しく口を結んだ。
まあ、こちらの言うことのほうが筋は通っていると自負している。朔夜もそれぐらいは分かっているのだろう。
それで、調子に乗った俺はつい、こんなことを言ってしまった。
「そもそもケーキとかどうでもいいもんは持って来てるのになんで1番大事なスコップを忘れて来るんだよ、お前は。遊びに来たんじゃないんだろ？」
すると、朔夜はぴたりと表情の変化を止めた。
（……？）
只ならぬ雰囲気に、俺は気まずさを感じた。
他の2人も恐ろしいほどに黙っている。
数秒後、朔夜はくるりと背中を向けて、
「……分かったよ。何か代わりになりそうなもの探してくるから、英輔達は適当に掘っといて」
そう呟いて、霧に向かって走っていった。
その声の端が、どこか上ずっていたのは、気のせいなんかじゃない気がした。
「さ……」
俺が彼女を呼び止める前に
「こんの……ガキィっ！！」
鼠女のそんな声と共に、頬を激しくはたかれた。
不意打ちだったので思わず俺は横倒れになった。
（いたた……）
「え、英輔クン、大丈夫？」
オカマ男がしゃがみこんで俺の顔を覗き込む。
俺は『大丈夫』だと手で応えて、目の前で俺を睨む鼠女を見上げた。
「……ったく、これだから男は嫌いよ！　なんっにも分かってない

んだから！！　アンタはここまで何しに来たのよ？」
紫の瞳に静かな怒りと、どこか悲愴を込めつつ、彼女は俺にそう問うた。
（……何しに……って……）

朔夜が『剣を探しに行く』っていうから、付いてきた。
それだけだ。
それだけ。
……本当に、
それだけか？

（そんなわけない）
俺は立ち上がって
「……ごめん。ありがとう」
俺は鼠女にそう言って、その横を通り過ぎた。

いつの間にか周りは濃い霧で覆われていて、自分がどこを走っているのか分からなくなって、足を止めた。
気がつけば頬が濡れていて、悔しかったので私は思い切りジャンパーの袖で顔を拭った。
（英輔の馬鹿。にぶちん。唐変木）
恨み言をつらつらと頭の中で反芻してから、私はひと息ついた。
……確かに、この山に来たのは土の神の剣を探すためだ。
土の属性を持つ武器があれば、アレを倒すときにとても有効だろう。

これは大事な仕事だ。
遊びじゃない。
だから、本当なら、彼を誘う必要はない。
けれど、あえて誘ったのは……

「……ほんと、分かってないなあ……」
また、涙腺が高まりそうだったので、私はしゃがみこんで、その場に縮こまった。
（結局英輔は『剣を探しに来た』だけで、ほんとに、それだけなんだ……）
なんだか自分が少し惨めだ。
というより情けない。
本当は英輔のほうが正しい。『遊びに来たわけじゃない』。なのに、自分はあんなに浮かれていた。

……冬休みが始まる前からせっせと準備して、
料理の美味しいホテルを探して、
有名なケーキ屋さんに無理して予約して。
英輔の家の前で待ち構えて、驚かそうと思ってベランダに登るタイミングまでちゃんと計ってた。

（……馬鹿みたい）
そう思うとまた涙腺が高まる。
こんな顔では、当分3人の前には帰れそうにない。
……そうしていると、背後で嫌な音がした。
ブゥン。
「！？」
羽音だ。虫の羽音だった。
思わず体が反応して、私はびくりと身を起こした。
昔から、虫は大の苦手だ。

どこが苦手なのかよく分からないが、とりあえず苦手なのだ。むしろ生理的に受け付けないと言ったほうが正しい。
すると目の前を黒いものが横切った。
「ひ！？」
派手な羽音を響かせて、それは私の周りを旋回する。
――昔から、そう。
虫という生物は、虫が苦手な人の周りに限って寄っていくのだ。
「寄るな！！　あっち行けぇッ！！」
ただでさえ泣いていたのに今度は虫ごときに私は半泣きにされていた。惨めにも程がある。
手には火光があるが、虫ごときに国宝級の刀を抜くのはやはり少し躊躇われた。
また目の前に迫った黒い虫を避けようとしたとき、身体が妙に後ろにのけぞった。
（！）
霧で周りがよく見えていなかったのがまずかった。
身体が浮いた瞬間全てを悟る。
私は道から足を滑らせて、斜面を転がる羽目になる、と。
――その刹那、私は誰かに手を掴まれて、力強く抱き込まれた。

第3話：目的（後書き）

ほとんど今日の日付の話だったということを忘れていました（汗）。
今から全部載せちゃいますね（↑ちょっと）

第４話：雨

霧はますます濃くなっていて、朔夜の姿を探すのに一苦労だった。
加えて彼女は足が速いのだ。
ここまで来るのに随分走ったから、下手するとさっき居た場所にまで戻れるかどうかも怪しい。
それでも、ようやく彼女の姿を俺はとらえた。
彼女は俺には気付いていないようで、なんだか妙な動きをしていた。
（？）
「さ……」
走りよって、声を掛けようとしたら、彼女の身体が後ろにのけぞった。
後ろは山の斜面だ。
（まずい）
俺はとっさに腕を伸ばして、彼女の手を掴んだ。
が、それだけではもう引き上げられるようなタイミングではなかった。
俺はとっさに彼女の身体を引き寄せて、受身の体勢を作る。
途端、ぐるぐると世界が回った。
目まぐるしい視界の変化に気を取られて、身体の痛みを感じる暇さえない。
斜面が落ち葉の絨毯で覆われていたお陰だろうか。
途中に大きな岩があったわけでもなく、障害物もなかったため随分と転がる羽目になったが、大した怪我もせずに何とか身体は止まった。
一息つく。さっきまで呼吸をしていたのかどうかも怪しい。
俺はそっと腕を緩めて
「朔夜、怪我ないか」

倒れたまま、彼女に尋ねた。
すると彼女は
「ない。大丈夫。……英輔こそ、怪我してる」
半分泣きかけの顔で、そう言った。
そう言われればなんとなくこめかみの辺りが疼くが、そんな大した怪我ではなさそうだ。
それより
「お前が怪我してなくてよかったよ」
そっちのほうが大事だ。
すると朔夜はまた瞳に涙を溜めた。
「英輔の馬鹿っ……さっきまで怒ってたくせに……」
「……別に怒ってなんかないよ」
「……こんなとこ来るんじゃなかったって思うでしょ？」
「思ってないし、思わない」
俺はゆっくり瞬きをしてから、覚悟を決める。
彼女に、謝らないといけない。
「……ごめんな、さっきは言いすぎた。俺、ほんとは剣なんてどうでもよかったんだよ」
俺がそう言うと、朔夜は驚いたように目を丸くした。
「……え？」
「俺は、お前と、『遊びに』ここに来たんだ。……これでも楽しみにしてたんだぞ」
俺が照れを隠しつつぼそりと呟くと、朔夜はぼたぼたと涙をこぼし始めた。
（あぁ！？　ちょ、っと……）
泣かせるつもりじゃなかったのに、と俺は焦る。すると
「わ、たし……」
朔夜はしゃくり上げながらこう言った。
「あのねっ……ほんとはっ、英輔に逢いに来たの……っ」
途端、胸がどうしようもなく疼いた。

「逢いたかったんだけど……英輔、メールもくれないしっ……機会がなかったから……っ……だから……」
俺は左手を伸ばして、彼女の頭に回した。
そしてそのまま、抱き寄せる。
それから素直に、こう言った。
「『逢いたい』って言ってくれれば、すぐに逢いに行ったのに」
すると朔夜は
「……ほんと？」
と、子供みたいに尋ねてきた。
「ほんと」
俺がそう返すと
「英輔は？　……逢いたかった？」
朔夜はそう訊いてきた。
まず普段なら素直に答えられない問いだっただろうが、今のこの状況なら答えられた。
「……ああ」

それから俺達は晴れそうにない霧の中を、手探りな感じで歩き始めた。
「……お前こそメールよこさないから色々心配してたんだぞ」
俺がそう言うと
「……だって鷹の方の友達がさ、『女性（レディー）から殿方に文を送るなんてはしたないわ』なんて言うから……でも英輔メールくれないし」
と、朔夜は拗ねた顔をした。
（……どんなお嬢さんだよ）
俺が呆れつつ
「男からメールするほうが恥ずかしいんだよ」
と言うと朔夜は非難するように

「なんでー？　中学のとき毎日５０通くらいメール送ってきた男子いるよ！？」
と言った。
（毎日５０通だ！？）
「待て、それはストーカーだ」
俺が言うと
「え？　そうなの？」
朔夜はきょとんとした。
（自覚なかったのかよ）
俺は少々彼女の価値観を心配しつつも少しその男のことが気になった。
「そいつ、どうなったんだよ」
「たまたま高志に言ったらその日のうちに止まったよ。その後転校してねー」
なるほど。あのお父さんなら色んな手で攻めたのだろう。
（……お父さん、ナイス）
こういうときは頼りになる人だと感心した。
そうこうしていると、ぽつり、と頬に水滴が当たった。
「……雨か？」
空を見上げると、朝から機嫌の悪そうだった空がついに癇癪（かんしゃく）を起こしていた。
「雨！？」
すると急に朔夜が慌てだした。
「どうした？」
俺が尋ねると
「緋衣、雨駄目なんだよ！　全身濡れたら死んじゃうって言ってたもん！」
朔夜は切羽詰った顔で訴えた。
「危なかったら刀の中に戻るんじゃないのか？」
「刀がある程度近くにないと戻れないんだってば！！」

朔夜はそう言って右手に持っていた刀を示した。
「早く戻らないと！！」
そう言って駆け出そうとした朔夜を俺は慌てて止めた。
「おい、無鉄砲に走るな！！　また落ちるぞ！！」
そう言いつつも、俺も鼠女のことが心配だった。
しかしふと気がついた。
「あのオカマ男が一緒ならまだなんとかなるんじゃないのか？」
俺がそう尋ねると、朔夜は微妙な顔をした。
……まあ、分からないこともない。
あの２人は相性最悪だ。協力関係を築けるのかどうかは少々どころかかなり怪しい。
「と、とりあえずあんまり焦るな、行くぞ」
俺は朔夜の手を引っ張って歩き出した。

私は適当な岩の上に腰をすえて、腕を組んで座っていた。
とりあえず、最悪の気分だった。
（どうして私があの無駄に鈍いガキの後押しをしなきゃいけないのよ！　あーもう、嫌になるわ）
加えて。
「ちょっと緋衣、アナタも手伝いなさいよ～。こんな柔な男に土木作業任せきりにさせる気？」
……どうしてこんな奴と２人きりになってしまったのか。
「うるさいわね！　前から思ってたけどアンタ年功序列ってのが分かってないのよ！　いい加減年上を立てなさい、アホ！」
私がそう言うと
「今時年功序列なんて古ッ！　それにたかだか２００年の差でしょ

ー？　そんなのカウントに入らないわー」
と、火砕は反論してきた。
……つくづく口の減らない男だと思う。
そんなわけで、私はいつもむきになって反論する。
喧嘩は終わらない。
……そういえば以前、誰かに言われたことがある。
『喧嘩するほど仲がいい』とか。
しかしこいつと仲良くなることなんてまずありえない。
男と女が仲良くなる先は、本当は1本道なのだ。
私はその道を、とうの昔に諦めた。
だから、男となんて仲良くならない。

……だから、たまに。
『もしこいつが女だったら、あるいは永遠の好敵手（ともだち）になれたかもしれない』
なんて、思うときがあるのだ。

（……って、何考えてんだろ）
私はそんな馬鹿な考えを振り払うように首を振る。
そうこうしていると、嫌な臭いが鼻をついた。
湿った、土の臭いだ。
敏感にそれを察知したはいいが、身体が恐怖で動かなくなっていた。
目の触れるところに、帰る場所（かたな）がないのだ。
（まずい……）
背筋に悪寒を感じたのと、手に小さな水滴が当たったのはほぼ同時だった。
まるで肌を溶かす酸。水滴は針のように肌を刺した。
「し、死ぬーー！！」
私は慌てて辺りを見回して雨を凌げる場所を探したが、皮肉にも

この辺りは土の壁が続いているだけだった。
すると火砕が
「緋衣、鼠の姿になんなさい！　省エネのほう！」
と、言ってきた。
「は！？」
「だから！　ここに入ればちょっとぐらいは凌げるでしょうが！！
小屋までワタシが戻るわ！」
そう言ってあいつは自分の懐の辺りを手で示した。
（……嘘）
「絶対イヤーーーー！！」
私がぶんぶんと首を振ると
「んなこと言ってる場合じゃないでしょ！！　色変わってきてるわよ、アナタ！！」
あいつはそう指摘した。
見ると、水滴をかぶった箇所から白い髪が紅く変化し始めていた。

火鼠は通常、炎の中に入ると紅くなる。
だが、私の場合違うのだ。
この身を焦がせるのは煉獄の炎のみ。
――即ち、死する時にだけ、紅くなる。

このままいくと確実に死ぬだろう。
「早くなさい！！」
火砕が切羽詰った声で催促する。
それに促されて私は無意識のうちに変化の力を使おうとしていた。
が。
（――これじゃ、変わらない。変わってない）
寸でのところで、ちっぽけなプライドがどうしても邪魔をした。
「やっぱイヤ！！」
私が叫ぶと、火砕は痺れを切らしたようにこちらの肩を掴もうと

した。私は反射的にその手を振り払う。
「アンタの懐に入るくらいなら死んだほうがマシよ！！」
私がそう叫んだ瞬間。
雨音を掻き消すような、乾いた音が辺りに響いた。
「……っ」
……頬が、痛い。
あいつにぶたれたという事実に、私は驚きを隠せなかった。
前を向くと、そこには妙に必死な、男の顔があった。
「君が死んだら憐が泣くぞ」
赤い眼は静かに怒っていた。
こいつのこんな顔は、見たことがない。
どうやら本気で怒らせてしまったらしい。

……嘘よ。
死んだほうがマシなんて、そんなこと思ってない。
そんな勇気があるのなら、もうとっくの昔に死んでるわ。
３００年前のあの時に。

……嫌い。嫌いよ。
本気で言ったわけじゃない。
それぐらい分かって欲しい。
これだから男は女の気持ちなんて分かってない。
だから嫌い。
男は嫌い。

……違う。
違う。違う。
ほんとは分かってるの。
私が本当に嫌いなのは――……

気が付けば視界がぼやけていた。
目頭が熱い。
まさかこのタイミングで泣くなんて、我ながら有り得ない。
すると火砕は少々困惑しているようだった。
なんとなく間抜けだ。あれだけ気迫に満ちた顔をしていたのに、私が涙を見せただけでこれだ。
しかしそれを見て、心なしか私の気分は落ち着いた。
私は一瞬で姿を変えて、これ見よがしに思い切り奴の胸に体当たりしてやった。
「ぅ」
火砕の微かな呻き声を聞きつつ、私は奴のポンチョの間にするりと身を隠した。
「さっさと小屋まで戻りなさい、馬鹿」
私がそう言うと
「それが人に物を頼む態度かってのよ」
そう悪態づきつつも、火砕は跳躍を始めたようだった。

第5話：埴安姫

雨はどんどん強さを増して、視界はほとんどゼロになってしまった。
（まずいな……）
鼠女のことを心配する前に、こちらのほうが心配になってきた。
冬の冷たい雨はどんどん体力を奪っていく。
繋いだままの朔夜の手も、冷え切っていた。
すると前方に、黒い大きな影が見えた。
「？」
よく見ると、それは洞窟だった。
「朔夜、洞窟がある。一旦あそこに入らないか？」
俺がそう提案すると
「……うん……」
とりあえず、元気のない返事が返ってきた。

ようやく雨のつぶてから解放される。
洞窟はかなり奥がありそうで、少し不気味な雰囲気をかもし出していたが、今は屋根があるだけありがたかった。
一方朔夜はまだ心配そうに空を眺めていた。
早く止むように願っているのだろう。
「……これだけひどい雨だ。多分オカマ男がなんとかしてくれてるって」
俺はなんとなしの自信を持って朔夜を励まそうとした。なんていうか、あの男、やるときはやるんじゃないだろうか。
「……うん。……そうだね」
朔夜もそう言って、少しばかり緊張を解いた。

それから、俺達は別々に座り込んで、しばらく雨が収まるのを待っていた。
洞窟はどこかに抜けているのか、風が吹き込んできて、決して温(ぬく)いとは言えなかった。
「……英輔、もうちょっと寄っていいよ。寒いし」
朔夜がそう言うので、俺は少しだけ彼女に近づいた。
「それじゃ意味ないよ。もうちょっと」
彼女が更にそう言うので、俺はしぶしぶ、彼女と背中合わせに座り込むことになった。
少しだけ触れる背中が、なんとなくむずかゆい。
「……雨、止まないね」
彼女はぽつりとそう呟く。
「……緋衣、大丈夫かなあ……」
「……そんなに心配か？」
俺がそう尋ねると、
「……ちょっとだけ。なんかね、あの2人、なんとなく怖いの」
朔夜はそんなことを言った。
「は？」
どういう意味かよく分からずに、俺が間抜けな声を出すと
「緋衣と火砕、最初に逢ったとき、どっちも死にそうな顔してたからさ」
なんて、彼女は言った。
「はあ？」
俺は信じられない、といった声を上げる。
「……信じてないな、英輔。まあ、いいけど」
朔夜は少しだけ拗ねたようだった。
「いや、別に……。ちょっと、想像できないっていうか……」
あの2人は常にギャンギャン喚いている印象しか俺にはない。
しかしそういえば。
（あのオカマ男、素じゃ確かにどこか寂しそうな顔してたかな……）

と思い直す。
「あいつらとはいつ逢ったんだ？」
俺が興味本位に尋ねると
「緋衣とは小学校のときかな。火砕は中学のとき。緋衣とは最初、友達ってだけだったんだけど、ちょっと色々あって刀の中に入ってもらったの。火砕は半分拉致的な感じだったかも」
と、なにやら物騒そうな事情を聞いてしまった。
「ふ、ふーん……」
「あ、でもね、いつかはあの2人には外に出てもらおうと思ってるんだよ。ずっと刀の中じゃ申し訳ないしね」
と、朔夜は弁明した。
「……あの、焔って子は？」
今ここでも姿を見せないあの少年は、彼女にとってどんな位置づけなのだろう。
「焔はもともと私の家の守護精霊だから、私からは離れないよ。多分」
それは、『多分』と付け加えた割りにかなり確信を込めた響きだった。
「へえ……」
なんていうか、少しだけ、羨ましいと俺は思ってしまった。
いつまでも、離れることなく一緒にいられる関係というのは、なんていうか、憧れる。
俺だって、ほんとは……
（……って何考えてんだ俺）
俺が1人赤くなって黙り込んでいると、朔夜がにわかに小さくくしゃみをした。
「……大丈夫か？　寒い……よな」
俺がそう尋ねると

「うん。英輔こそ人肌で暖めようとか変なこと言い出さないでね、見損なうから」
（な）
「んなこと言わねえよ！！　少女漫画の見すぎだお前は！！」
俺が叫ぶと朔夜はくすくすと笑った。
背中に程よい振動を感じる。
（あ、ちょっと温いかも）
なんて思っていると、なんだか揺れが激しくなってきた。
（？）
ぐらぐらと。
既に体全体が激しく揺れているような……
「って！！　地震か！？」
洞窟の中で地震はまずい。
そう思って俺が立ち上がるのと、朔夜が立ち上がるのはほぼ同時だった。
しかし
「英輔、後ろに下がれ」
急に口調を変えた彼女は上着のポケットからそつなくグローブを取り出して素早く手にはめ、持っていた刀を抜いた。
「は？」
わけもわからず問うと
「奥から何か来る」
彼女はそう言って洞窟の奥の、暗闇を睨んだ。
すると、闇の中で何かが蠢くのが見えた。
「……！！」
見えたのは、金色に光る双眸。
それは一気にこちらに迫ってきた。
俺は半分朔夜に突き飛ばされて、洞窟の外に転がり出た。
朔夜はというと、華麗に避けて着地していた。
その視線の先には、白い、大蛇がいた。

大蛇と言っても明らかに天然ものではない大きさだ。頭の大きさが象1頭の全長と同じくらいなのだから。
不気味に赤く、長い舌をしゅるりと出して、それは舌なめずりをするように俺達を見た。
「……霊山に住む妖か。どうやら腹が減ってるらしいな」
朔夜はひるまずにそう言った。
俺はどっちかって言うと蛇が苦手だ。出来ればあまり凝視したくないのだが、
「あ……」
大蛇の首の辺りに、何かが刺さっているのが目に入った。
剣だ。濃い緑色の剣。
「朔夜、あれ！！」
俺が指摘すると、朔夜もそれを認めたようだった。
「土の神の剣に間違いないな」
そうこうしていると大蛇は朔夜に向かってまたその首を伸ばした。
剣を抜くチャンスといえばチャンスだ。
思ったとおり、朔夜は火光で蛇の牙を受け止めつつ、首の辺りに刺さっているその剣に手を伸ばした。
が。
「！？」
一瞬静電気のような小さな光が走ったかと思うと、朔夜の手は剣から弾かれていた。
同時に牙を支えていた火光が外れて、蛇の顎が朔夜を飲み込む。
「朔夜っ！！」
俺が叫ぶのと、何かが爆発するような音がしたのは同時だった。
一瞬、何が起こったのか俺には分からなかった。
蛇は鼻と口から煙を上げている。その金の眼は既に生気を失っていた。
あんぐりと開いたその巨大な口から出てきたのは、朔夜と、白い衣服を纏った少年だった。

……なんというか、あの小さな少年が朔夜を難なく抱えている光景が、どこか不自然といえば不自然だった。
が、2人が不釣合いには見えないのが不思議といえば不思議だ。
「ありがとう、焔。助かったよ」
朔夜が彼にそう礼を言うと、彼はそっと彼女を地に下ろしつつ、
「これぐらいお安い御用だ」
と、柔和に笑みを浮かべた。
そんな輝かしい光景を眺めて
（……俺、形無し……）
と、妙に落ち込みつつ、俺はとぼとぼと2人の前に歩み寄る。
「これ、抜こうとしたら弾かれたんだけど」
と、朔夜が蛇の首に刺さったままの剣を睨みながら言う。
「……これは、相当な代物だな。特殊に封印されているらしい。もしかすると同じ属性を持つものにしか抜けないのかもしれない」
と、少年は言った。
「えー？　土の属性なんか持ってる人なんて……」
と朔夜が言いかけて、はたりと、俺のほうを見た。
「いるじゃん。英輔なら抜けるんじゃない？」
と、『棚ぼたラッキー』的なノリで顔を輝かせた。
「ふむ、確かに彼なら抜けるかもしれないな。剣の属性を読み取ればいい」
と、少年も言う。
なんだか妙なプレッシャーを感じてきた。
これで抜けなかったら、どうしようもなく落ち込みそうだ。
（……くそ、仕方ないなあ……）
俺は深呼吸してから、そっと、深緑の剣に手をかけた。
柄を握った途端、鼓動が速くなる。
それに合わせて剣から力が流れ込んでくる感じだ。
（……く）

正直、かなり苦しい。息が詰まりそうだ。
恐らく剣の力が半端ないのだろう。俺ごときの器じゃ受け止めきれないのかもしれない。
が、しかし。
（……ここで引き下がれるかよ）
せめてこれくらい役に立たないと、気がすまない。

さっきの2人の光景が脳裏をよぎる。

……我ながら馬鹿らしい理由だとも思う。
けど、俺だって。
俺だって、彼女の力になりたいんだ……！

「抜けろ！！」
精一杯力を込めて引っ張り上げると、それはすらりと刀身を表した。
碧に光る、平らな刀身。どれほど長い間眠っていたのかは知らないが、まるで鏡のような美しさだった。
「抜けた！！」
朔夜の歓喜する声が聞こえる。それで俺もほっと一息ついていると、次の瞬間、剣から光があふれ出した。
「な、なんだ！？」
あまりの眩しさに目を閉じる。
すると、俺の頬に、誰かの手が触れるような錯覚を覚えた。それは、とても軽くて、薄い感触だった。
そして次の瞬間には。
「――――？」
唇に、そよ風か何かが当たったかのような衝撃が走る。
そよ風のように軽いのに、なぜか衝撃を感じたのは、目の前に見知らぬ少女の顔があったからだろう。

「――な！？」
傍らから驚きや呆気が混ざったような朔夜の声が聞こえる。
そんな声を無視して、その少女は顔を離して俺に会釈した。
「封印を解いてくれて助かったぞ、若人。妾（わらわ）はその剣に宿る精霊、埴安姫（はにやすひめ）と申す」
やけに古臭い言葉で喋るその少女は、長い黒髪をなびかせて、宙に浮いていた。身体もうっすらと透けている。実体を持つ妖とはまた別のものなのだろう。
……というより。
（え、ちょっと待て、俺、さっき、こいつに、キ……）
俺が動転していると
「ちょっと待て！！　はに……なんとか、なんでいきなり英輔にキスしてんだよ！！」
と、口調まで荒げた朔夜が俺の気持ちを代弁してくれた。
「ん？　先ほどの接吻は封印を解いてくれたことへのお礼の気持ちじゃ。いつの世も女子（おなご）に接吻されて喜ばぬ男子などおらぬじゃろ？」
と、そいつはすごいことをさらりと言ってのけた。
「んなーー！？　え、英輔、何か言ってやれよ！！」
朔夜はぴりぴりと俺に振ってくる。
「え、いや、あの……」
俺はまだ動転していてそれどころじゃない。
すると
「お主、よく見ると可愛い顔をしておるの。英輔と言ったか。今夜は妾と共に寝てくれな？　ずっと封印されっぱなしで随分と力が弱ってしまっての」
と、碧の瞳をあだっぽく潤ませて、そいつは俺に擦り寄ってきた。
「な、なな！？」
俺が更に動揺していると
「馬鹿英輔！！　なにたじろいでんの！！」
朔夜が癇癪を起こしてそいつを引き剥がそうとした。

「これ、何をする娘！！　妾はこやつが気に入ったのじゃ、引き離そうとしても無駄じゃぞ！！」
「うるさい埴輪（はにわ）！！　いいから離れろーー！！」
「埴輪じゃない！！　埴安姫じゃっ！！」
「どっちでもいいし！！　とにかく！　今日は英輔は私と寝るの！！」
どさくさ紛れに朔夜はとんでもないことを口にした。
「ちょ、ちょと待て朔夜！！　そんなこと聞いてな……」
「うるさーい！！　英輔も鼻の下伸ばしてんじゃないよ、このむっつりスケベ！！」
……だから。
「俺はむっつりじゃないって言ってるだろーーーー！！」
俺の叫びはこだまとなって、山に響いた。
気がつけば、雨はすっかりやんでいて、霧もさっぱり晴れていた。

第6話：1日遅れのメリークリスマス

とりあえず急いで小屋に戻ると、ずぶ濡れのオカマ男が外で焚き火をしていた。
「火砕！　緋衣は？」
朔夜が真っ先に尋ねると
「部屋で縮こまって寝てるわよー。色も元に戻ってたし、大丈夫なんじゃない？」
と、オカマ男は疲れきった声で答えた。
恐らく、彼も水は得意ではないのだろう。なんといっても元は蛾だ。
「火砕、ありがとう」
朔夜もそれを察したのか、オカマ男に礼を言っていた。
「別にー。あら？　剣、見つかったみたいね？」
オカマ男は剣を持つ俺を見てそう言った。
「……まあね」
そう答える朔夜はぎろりとこちらを見た。今だに埴安姫は俺の腕から離れない。
「おい埴輪、あんまりくっつかないでくれ。朔夜が怖い」
俺がそう言うと
「もーう、ハニーと呼んでくれて構わんのじゃぞ」
と、語尾を可愛く上げてそいつはにっこりと微笑んだ。
……外見とかは若い子ぶっているが、こいつは一体何歳なのだろう。
少なくともオカマ男とかよりかは年上な気がする。なんとなく。

日も落ちて、俺が本日2度目の風呂から上がると、またしても朔

夜が待ち構えていたかのように部屋から顔を出した。
「英輔、ちょっとちょっと」
と、手招きをする。
「なんだ？　そっち、『男子禁制』って書いてあるだろ？」
と俺がからかうと
「いいもんそんなの。いいから」
と、彼女は俺の腕を引っ張った。
部屋に入ると、鼠女の姿が見当たらないことに気がついた。
「あいつは？」
と尋ねると
「緋衣？　外で何かしてるみたい」
と朔夜は言いながら、何かをリュックから取り出した。
「英輔、そこに座って」
と彼女はベッドに腰掛けるよう指示する。
「？」
言われるがままに俺が腰掛けると、朔夜もすぐ隣に腰掛けた。
ベッドが軋む。
（……！）
昼間もとても近距離で座ったりしたのに、なぜか妙に俺の心臓は跳ねる。
（なんていうか、夜の、ベッドは、良くない、ぞ）
なんて勝手に俺が思っていると、
「英輔」
と、名前を呼ばれてさらにどきりとする。
自分の顔が赤くなっていることに気付いた俺は彼女の顔を直視できなかった。
すると
「はい、これ」
と、彼女は俺のこめかみに何かを貼り付けた。
「……？」

指で触ると、それは絆創膏だった。
「それ、私のせいだからね。……ごめんね」
と、朔夜は謝ってきた。
「え……いや、別に気にしてないのに……」
と、俺が本音を言うと、朔夜はどこかほっとしたような、それでもどこか寂しそうな顔をした。
（……？）
たまに、彼女のことがよく分からないときがある。
どうしてそんな顔をするんだろう。
けれど俺がそんなことを尋ねる前に、彼女はぱっと表情を切り替えて、
「そう？　ありがとう」
と、いつもの笑顔でそう言ったので、俺は何も言えなくなった。
「なあ、明日にはもう帰るんだよな」
俺がそう切り出すと
「そうだね。まあもともとこの山、観光用じゃないし」
と、朔夜は苦笑して言った。
（……じゃあ）
「じゃあさ、今度はもっと違うとこに行かないか？」
俺は思い切ってそう提案した。
「……今度？　違うとこって？」
朔夜は不思議そうに尋ねてきた。
「春休みとかに。遊園地とかどうだ？　お前好きそうだけど」
俺がそう言うと
「え？」
と、朔夜はどこか間抜けな声を出した。俺がこんなことを言いだすなんて、想像だにしていなかった様子だ。
俺は少し不安になって
「……嫌か？」
と尋ねると、朔夜は勢いよく首を振って

「ううん！！　行く！！　絶対！！」
と、まるで子供のようにはしゃいだ。
それを見て俺は少しだけほっとする。
やっぱりこいつは、こんな風に笑ってるほうがいい。
「英輔、約束だよ！　絶対だからね！！」
と、朔夜は指きりの小指まで用意した。
俺は少々恥ずかしく思いながらも小指を差し出す。
「ゆーびきーりげんまん、うそついたら針千本のーますっ、指切ったっ」
子供みたいにそう歌って、俺達は約束した。
春に、また逢おうと。

隣室から聞こえる憐と英輔の楽しそうな声を背に、風呂に入ろうと外に出た私は、どこからともなく漂うアルコール臭に気がついた。
それを辿ると、山小屋の壁にもたれて、だらしなく座り込んでいる、銀糸の髪の女を発見した。
その足元には何本もの徳利（とっくり）と、お猪口（ちょこ）が散乱していた。
「……酒臭いわよ、アナタ。ていうかどっからそんなもの持ってきたのよ」
私が呆れながらそう尋ねると、緋衣は半分夢の中のような声で言う。
「……るさい。山の鼠が地酒持ってきてくれたのよー……」
すると少し離れた茂みががさがさと揺れた。数匹の茶色い鼠達がこちらを窺っている。
（……貢物（みつぎもの）というわけか）
蛾である自分には分からないが、もしかすると鼠達の世界には多

少の縦社会というものが存在するのかもしれない。
人の姿に化けられるほどの力を授かった生き物は、おおよそにおいて同類から敬われ、憧れの対象となる。
他とは比較にならないほどの長寿をも得る。
まあ、始めは悪い気はしない。
自分は特別なんだと、その生に誇りすら持つだろう。
しかし特別になるということは、他の者達とは違う世界で生きる、ということだ。
見知った仲間は次々に年老い、新たに出来た仲間ですら、ほんの僅かな時間を共にしただけで消えていく。
取り残されていくような、孤独。
人間の中にも『不老不死』というものに憧れる者がいるという。
しかし莫大な年月の間に多くのものを望めると思うのは、ただの幻想だ。
だって、結局。
失くすもののほうが、多いのだから。

「……ぅー……」
にわかに、目の前の彼女は涙を見せ始めた。
（――相当酔ってるな、これは……）
私が呆れていると
「憐ちゃんもー……あの馬鹿男と戯れてるしぃ……寂しい、なぁ……」
そうぼやきつつ、うつらうつらと首を揺らす彼女に
「ちょっと緋衣、こんなとこで寝たら風邪引くわよ」
私はそう言い聞かせるが、相手は聞く耳ももうないようで、ついには、静かに寝息を立て始めてしまった。
（……ああもう）
私は頭を抱えつつ、どうしようかと悩む。

下手に動かすと後で何を言われるか分からない。
かといってこのまま放っておくのもどうかと思う。
例えばあの鼠達。見たところ雄ばかりのようで、この女王様に下心を起こさないとも限らない。
眠りこけている彼女をもう1度よく見る。
昼間着ていたコートは今はどこへやっているのか、長い脚や肩を大胆に出した服はこの寒空の下だと寒々しいとしか言いようがない。だが、酒で火照ったその肌は、この上なく艶めかしく見える。
加えて、このあまりの無防備さ。
「……」
自分でも気付かぬうちに、少し眺めすぎたことを私は後悔しつつ、
（……男嫌いのくせしてどうしてこんなに扇情的な格好をするかな）
と常日頃から思っていた疑問で文句をつけてみる。
が、すっかり眠り込んでいる彼女の顔は、自分より２００も年上だという事実を感じさせないほど、幼いものに見えた。
（……仕方ないな）
私は色々考慮した結果、やはり彼女を動かすことにした。今は憐達が女部屋にいるから、男部屋に運ぶのが得策だろう。
起こさないように、慎重に、かつ素早く彼女を抱え、そっと歩き出す。
しかしそこまで慎重にならずとも、彼女は目を覚ます様子を見せなかった。
ただ、
「……リウ……シン……」
寝言だろうか。彼女の唇から、そんな異国の響きが漏れた。
「……」
これは直感なのだが、さっきのは、男の名前ではないだろうか。
そのことが少し意外、……というわけでもない。
「結局私達は、似たもの同士というところだな」
私はそうひとりごちて、小屋へと入っていった。

その日の晩は、なんというか、大変だった。
「埴輪！！　いい加減諦めてよ！！」
朔夜の声が響く。
「いーやーじゃっ！！　お主は炎の属しか持っておらぬではないかっ！！　妾は英輔と寝るのじゃ！！」
そう駄々をこねる埴輪こと埴安姫。
「……」
俺はそんな2人を眺めつつ、何も言えない。
ここは男部屋だ。昼間も言っていたとおり、埴輪の奴が俺と一緒に寝るとかなんとか言って聞かないので朔夜が文句を付けているところだ。
しかしその前に、既に男部屋のベッドで妙に酒臭い鼠がちんまりと眠っているのが気になったといえば気になった。
オカマ男は既に窓ガラスに貼り付いて眠る準備をしている。
「ええい小娘、こうなったら勝負じゃ！！」
埴輪がそう言い出した。
（は？）
俺が呆気に取られていると
「望むところ！！　何で勝負するのさ！？」
朔夜はやる気満々の様子だった。
「女の勝負じゃ、決まっておろう？」
『決まっておろう？』と言われても俺にはぴんとこなかった。が
「……分かったよ。嘘ついちゃ駄目だからね。英輔、ちょっとあっち行って」
と、朔夜は分かっている様子で、俺に離れるよう手で指示した。

「？」
俺は理解できないまま、とりあえず部屋の隅に寄った。
すると、２人は
「じゃあ同時で」
と寄り合った。
（……仲良いんじゃないのか？　あいつら）
俺が呆れているうちに、ぼそりと、何か数字のようなものが同時に聞こえた。
すると
「「なーーーー！？」」
２人は同時に叫び声を上げた。
「なんでバッチリ同じなのさ！！」
朔夜は顔を赤くして叫ぶ。
「知らぬわ！！　くっ、多少は妾が勝っておると思っておったのに……！！」
と、埴輪は悔しそうに言った。
（……）
なんとなくだが、あの２人の勝負の内容が分かってしまって、俺は目線を泳がせた。

そして、結局。
「仕方あるまい。では皆（みな）で眠ろうではないか。　どうじゃ英輔？　両手に花、枕元に鼠というのは」
と、埴輪が言い出した。
「いや、……俺、床で寝るから」
俺がそう言うと
「んなっ！　じゃあさっきの意味ないし！　恥を忍んで勝負したのにっ！！」
と朔夜が攻撃してきた。
「そうじゃそうじゃ！！　妾もふかふかのベッドで眠りたいのじゃ

っ！！」
埴輪も追撃する。
「……」
（それって結局埴輪がベッドで眠りたいだけなんじゃないのか）
そんな俺の心の呟きなど2人は知らず、朔夜はベッドに潜り込んで、枕をその傍らに置いた。
「ここから入ってきちゃ駄目だからね、英輔。襲ったら殺すっていうの覚えてる？」
半分立派な脅し文句を言いつつ俺が布団に入るのを待つ朔夜。どうやら本気らしい。
俺は溜め息をつく。
全く、朔夜のお父さんはどんな教育を施してきたんだろうか。
とりあえず俺もその場しのぎにベッドに入った。
勿論朔夜とは背中合わせだ。
片手には剣を握っていないといけないという不自然さを我慢しつつ、朔夜が寝静まるまでこのまま待機しようと思う。
「おやすみ、英輔」
やけに満足そうにそう挨拶する彼女に
「……おやすみ」
俺はそう返して、眠ったふりをした。

瞼を閉じてからは、煩悩との戦いだった。
最初は、意外と落ち着いている自分に俺は少し得意になっていた。
（……なんだ、俺、結構いけるぞ。もしかしたらこのまま眠っちまうかもしれないな）
しかし、ふとこうも思う。
（……女子と仮にも同衾してるのにここまで落ち着いてていいんだろうか、若い男が）
そういえばヒロは合コンに行くとか言っていた。

他の奴らもとても楽しみにしてそうな顔をしていたが、俺は別に合コンに行きたいと思ったことはない。
（もしかすると俺はまだ精神的に幼いのかもしれないな……）
が、しかし。
朔夜が寝返りでも打ったのか、もぞりと布団が動いたかと思うと、足の先がこつりと触れ合った。
「！？」
途端に、落ち着いていた俺の鼓動は早鐘のように高鳴りだす。
（……お、落ち着け俺！）
しかしそんな俺の気も知らないで、今度は朔夜の手が俺の背中に当たった……というよりもう完全に触れている。
背中が温かい。というより熱い。
まるで後ろから捕まえられたかのような錯覚を覚える。
罠にはまった獲物みたいに、逃げられない。
いや、違う。
逃げられないんじゃなくて、逃げたくないんだ。

このまま寝返って、その手を握り返したくなる。
昼間みたいに、いや、昼間よりもっと強く、彼女を抱き寄せたくなる。
……3ヶ月だ。
ここにきてようやく俺は、3ヶ月間溜まりに溜まった感情を体で自覚した。
けど、駄目だ。
そんなことをしたら、こんな。
背中合わせに眠れる、こんな温（ぬる）い関係は、壊れてしまうだろう。
……いや、もしかすると。

壊れてる。
俺はもう、多分壊れてる。

（駄目だ）
俺は寝ぼけかけの火照った顔を振り払うよう、大きく瞬きをして、するりとベッドから逃げ出した。

朔夜は目覚めなかった。それが少し幸いだ。手に握ったままの剣も音を立てない。埴輪もまだ眠ったままなのだろう。
朔夜はとても気持ち良さそうに寝ている。
そんな幸せそうな顔を見て
「……たく」
俺は小さくぼやいた。
文句のひとつでも言ってやりたい気分だ。
やはり彼女のお父さんに『軽々と男と一緒に寝るなんて言っちゃ駄目だ』と教えておいてもらわなければならない。

でも、どうなんだろう。
こいつは何で俺と寝るなんて言い出したのか。
（……前だって……急に、キスするし……）
もともとそんな奴なのか、と思えばそれきりだが、そんなわけはない。だって、前のキスは、こいつのファーストキスだって言ってたんだから。
今日も、俺に逢いに来たんだと言ってくれた。
もしかすると……なんてピンク色な想像が頭を一瞬だけよぎるが（ないない。襲ったら殺すって言ってたし……）
俺は恐ろしくなってぶんぶんと首を振った。
分からない。ほんとにこいつは分からない。

そのままじっと彼女を見ていると、俺を掴んでいただろうその手が、宙を掴むように空っぽになっているのが少し気になった。

（……こいつ、またうなされたりするのかな）
枕元には変わらず鼠が横たわっている。
朔夜がもしうなされてあれを掴んだら鼠女が窒息死してしまうかもしれない、とかいうなんとも真夜中に相応しいホラーな光景を想像した俺は、
（あ、そうだ）
ひとつ良い手立てを思いついて、音を立てないよう自分の鞄をあさりだす。
取り出したのは、ついこの間、ヒロと行ったゲーセンでたまたま取った景品の人形。『カエル将軍』クリスマスバージョンだ。
……実は昨日朔夜にやろうかと思って一応鞄に忍ばせていたのだが、オカマ男や鼠女がいたので渡す機会を見出せなかったのだ。
自分の不器用さに苦笑しつつ、俺はそっと、彼女の手のひらにその人形を押し込んだ。
すると、朔夜は無意識か、その人形を軽く握って受け取ってくれた。
（……赤ん坊みたいだな）
俺はそう思って笑みをこぼしつつ、彼女に告げる。
「……遅くなったけど、メリークリスマス。朔夜」

第6話：1日遅れのメリークリスマス（後書き）

エピローグも是非どうぞ（笑）

エピローグ

翌朝、人形に気がついた朔夜は超ご機嫌で、アミューズメントの景品でそこまで喜んでもらってむしろこちらが申し訳なく感じるほどだった。まあ、あげた側としてはこれ以上ない幸せではあるが。

二日酔いの鼠女のお陰で、山の下りはオカマ男との喧騒はなかった。その分朔夜と色々話が出来たのはありがたい。

途中までは同じ電車に乗って、特急に乗り換える駅のホームで俺達は別れることになった。

「うわーん！　どうして妾は憐に連れて行かれなくてはならぬのじゃーー！！　英輔ー、妾を誘拐しろーー！」

朔夜が適当な布でぐるぐる巻きにした剣から、埴輪の声が聞こえる。

「またな、埴輪」

一応俺は埴輪に声をかけた。

すると朔夜が、じっと物言いたげな目でこちらを見てきた。

「……な、なんだよ朔夜」

俺がたじろぐと

「……別に。英輔、埴安姫のことは埴輪って呼ぶんだね」

と、彼女は呟いた。

「は、あ？」

意図がよく分からずに俺が変な声を出すと、朔夜は眉をひそめて

「だからー……私のことはずっと『朔夜』のままじゃん」

と、言った。

（……え）

それは予想だにしない非難だった。

だってかなり今更だ。

「じゃ、じゃあなんて呼べば気が済むんだよ」
俺が尋ねると、朔夜は目を丸くさせて、それから視線を泳がせて考え始めた。
（おいおい、言っといて考えてなかったのか）
「名前で呼べばいいのか？」
俺がそう言うと、朔夜は腕を組んで
「ううん。憐は駄目」
と、妙なことを言った。
「はあ？」
『お前の名前だろ？』と、喉の辺りまで出かかったのだが、
（あ、いや、ほんとの名前じゃないんだっけ……）
と気がついて俺はその言葉を飲み込んだ。
（……でも学校の奴らには普通に呼ばれてたよなあ？）
俺が不思議に思っていると、朔夜は
「……まあいいや、今のままで」
と観念した。
「……そ、そうか？」
どうも、後味が悪い。

もうすぐ俺の乗る電車がやって来る。そろそろ向こう側のホームに移動しないといけない。
「じゃあな、朔夜。今度はいつでもメールしていいから」
と、俺は彼女に手を振る。
「英輔こそ、変な意地張ってないでメールしてよね」
と、朔夜は念を押すように言った。
俺はそんな彼女を一瞥してから、背を向ける。
（さて、帰りは寝過ごさないようにしないとな……）
なんて思いながら階段に向かって歩いていると、
「英輔っ」
後ろから朔夜の声がして、俺は振り返った。

途端、冷たい両手で頬を包まれる。
それに驚いている暇もなく、
「！」
また、唇に衝撃が走る。
しかしそれは、精霊のそれとはまた違う、もっと実体的で、強くて、甘い口付けだった。
触れ合う時間は短い。
けれど、唇が離れた後も、俺は場所を忘れてしばしその余韻に浸っていた。
なんていうか、足元がおぼつかない。昇天しそうだ。
が、周りにいた電車の利用者数人に少しばかり注目されていることに気がついて、急に地上に引き戻される。
「あ、の、お前、また……」
顔を真っ赤にした俺がしどろもどろになっていると、目の前の彼女のほうも少しばかり頬が紅潮しているようだったが
「……埴輪の言ってた通りだね。英輔、嬉しかった？」
なんて、とても挑発的なことを言ってきた。
「……な！！　お、お前な！！」
俺が怒り出そうとすると、朔夜はするりと離れていって、ホームに入ってきた電車の乗り口へと走っていき
「さっきのはプレゼントのお礼だよ、英輔。ありがと！！」
なんて、満面の笑みで手を振ってきた。
（……あいつは～～）

まったく、俺をなんだと思ってるんだ。
女なら誰からでもキスされれば嬉しいってわけじゃない。
そう、やっぱり好きな子からじゃないと、意味がないと思うんだ。
だから。
だから。

「……気をつけて帰れよ」
俺は完全に緩みきった頬で、そう呟いた。

ああ、全く格好悪い話だ。
なんだかんだで結局やっぱりあいつに振り回されている。
でも、悪くはない休暇だった。
いや、『楽しい』休暇だった。
帰ったらヒロに自慢してやってもいい。
いや、したらしたで色々言われそうなのでやはりやめておこう。
この思い出は胸のうちにそっとしまう。
また、新しい出来事を迎えるために。

「また逢おう」
車窓からも手を振る彼女に、俺は口の動きでそう伝えた。
彼女は変わらない笑顔を車窓から覗かせて、彼女を乗せた電車は走っていく。

春、彼女のこの笑顔が死ぬほど恋しくなるなんて、このときの俺はまだ、知らなかった。

エピローグ（後書き）

短い期間でしたが第２章、一応完結です。
・・・なんだか話が進むごとにＰＧ１２に近づいているようないないような・・・って（汗）。
今回はクリスマスネタということでたまにはこんな時事ネタもいいかなーといそいそ書きました。
本作は本当にミッドナイトブレイカーの番外編、といった位置づけで、これ単体ではただの痴話話といってもいいほど（汗）ほとんど意味をなさないお話ですが、各所で出てきたちょっとしたネタが完結編の３章に出てくるかもしれないので、「３章まで読んでやるよ！」という気概のある方は是非心のどこかにとどめておいていただけると幸いです。
ではまた春（３月ごろ）にお会いできることを祈りつつ・・・。

ｐ．ｓ．・・・お正月に新しいオリジナルのＰＣサイトを立ち上げます（予定）。そのときはＴＯＰに貼っているリンクがそちらに移行されますのでご注意ください。

２００９年１月４日追記
上記のとおり新しいサイトを立ち上げました。今度のサイトは「なろう」さんに上げている小説メインのサイトでして、今現在はミッドナイトブレイカー強化期間です。
本作は今後挿絵を入れたり第１章を基礎にしたノベルゲームを作ったり（笑）まだまだ盛り上げていく（いきたい）所存ですので、春の真の完結までもうしばらくお付き合い願えれば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7555f/

ミッドナイトブレイカー2〜土の神の剣〜

2010年10月8日14時46分発行